

# 出版資本主義再考

— 比較社会的観点から —

鵜飼 大介

## 1. 印刷技術の意義をめぐって

文字の歴史において印刷技術の出現は大きいものだった。たとえば印刷技術の出現によって、手書きで写本をするよりも、大量かつ迅速に、そして比較的安価で書物が生産されることができるようになった。印刷技術の出現以前、つまり文字といえはすべて手で記していた頃よりも、文字はいつそう広まることになった。いよいよ拡散していく文字、多く作られ流布されていく書物は、なにほどこか社会変容を引き起こさざるをえない。

ヨーロッパの言語史を顧みれば、地方の有力な俗語が印刷されることによって広まり、それがやがて近代諸国語になっていったという過程を知ることができる。ベネディクト・アンダーソンによる「想像の共同体」の議論は有名だが、彼はネーションを形成するメカニズムとして出版資本主義（print capitalism）に言及している（Anderson [1983] 1991=1997）。出版資本主義とは、印刷技術・出版活動と資本主義との結合体である。近世ヨーロッパにおいて印刷技術と出版活動が、徐々に発展しはじめていた資本主義と結びつき、ラテン語の出版物を生産するだけでなく、各地で俗語による出版物を生産し広めていった。俗語の出版物はやがて増加していき、それが各国の国語や国民意識の形成に寄与したというわけである。

とはいえ、出版と資本主義の関係をどう捉えるかとなると、論者によって見解が異なってくる。アンダーソンは、出版のもっている影響力が資本主義的な活動によって助長されたと論じているように思われる。他方で、大澤真幸は資本制という形で現象する社会システムの潜勢力を、出版の活動が促進したと考えている（大澤 1995: 323）。もっとも、ネーションについていえば、アンダーソンの説明では、出版、とりわけ出版によって広まった俗語を読書などによって習得することが、人々のネーションへの熱狂的な関与（ナショナリズム）にどうつながるかという点の説明が難しい。大澤の説明では、資本制がナショナリズムの成立にどのように結びついていくかという点が要所であり難所となる。ともあれ、ここではネーションおよびナショナリズムは措いておいて、出版と資本主義の関係について見ていこう。

ヨーロッパではグーテンベルクが活版印刷術を発明して以降、活版印刷術は急速に広がっていった。いわゆるメディア論の領域では、ヨーロッパにおける活版印刷の出現の意義はくりかえし注目され、強調されてきた。メディア論の鼻祖、マーシャル・マクルーハンは『グーテンベルクの銀河系』で次のように述べている。

活版印刷の発明は、応用知識の特色である新しい視覚強調を保証し、拡大した。その結果生れたのが、最初の、均質にして反復可能な〈商品〉であり、最初の組み立てライン、最初の大量生産方式であった。(McLuhan 1962=1986: 192)

マクルーハンによれば、活版印刷術による書物の生産工程は最初の大量生産方式であり、それによって生産される書物は均質で反復可能な商品である。ウォルター・オングはこうしたことをもう少し詳しく次のように説明している。

各文字が、べつべつの金属鋳型、つまりべつべつの活字でつくられているアルファベットの活版印刷は、心理的な飛躍を実現した多くのもののなかでも第一級のものである。それは、ことばそのものを製造過程のなかに深く組み入れ、ことばを一種の商品 *commodity* にしたてた。置き換え可能な部品からなる同一の複合的な製品を、一連の組立て工程を通じて生産していく製造技術、つまり、組み立てラインの最初のもは、ストーヴでも、靴でも、兵器でもなく、印刷本を生産するラインだった。十八世紀の後半に、産業革命が、この置き換え可能な部品による生産技術をほかの製品の製造にも適用したのだが、印刷業者は、三百年もまえからそうした技術を使っていたのである。(Ong 1982=1991: 244)

活字で印刷されることによってことばは「商品」になるという指摘や、組み立てラインの最初のもは、印刷本を生産するラインであるという指摘は示唆的である。マクルーハンにせよオングにせよ、近代（の分業的な大量生産方式）を先取りしたものとして、活版印刷を捉えているように思われる。彼らの論調のいささか技術決定論的な傾向を修正して、活版印刷という技術自体に先進性があったというのではなく、それを有効に用い、技術のポテンシャルを活用する社会的文脈があってこそ先進性が発揮された、と言い換えてもよい。

このように活版印刷の近代的・先進的意義を強調する見方を、ロジェ・シャルチエは歴史的事実に照らして批判し相対化している。彼はフランスにおける活版印刷・出版に注目し、フランスに印刷機が導入された1470年から1830年代までの期間を、「活版印刷のアンシャン・レジーム」(*l'ancien régime typographique*)と呼んでいる(Chartier 1992: 46)。「活版印刷のアンシャン・レジーム」期において、印刷・出版はいくつかの限界に直面していた。シャルチエによると、本の印刷部数は1000部から2000部どまりで、18世紀末の工房は初期の工房と同様、主に手作業による技術に頼っていた。また、書籍商人が出版業を思うがままに牛耳っていた。つまり印刷部数の少なさ、技術の停滞、書籍商人による出版業の支配<sup>1)</sup>などにより、出版・印刷業は十分に発展しきれなかった(Chartier 1992: 78-80)。アンダーソンもまた、19世紀まで本の発行部数は比較的小さかったことに言及している(Anderson [1983] 1991=1997: 73)。結局19世紀に入るまで、出版・印刷業はさまざまな制約により、必ずしも十分に展開したわけではなかった。

ところで、シャルチエはもうひとつ重要なことに注目している。もっとも、これは中国や日本

の印刷史を多少知っていれば自明のことではあるが、「徳川時代の日本でも、明代末期の中国でも、西洋型の方法、つまり印刷機と活字なしに、ゲーテンベルクの発明なしに、書物の流通、印刷されたテキストの流通、すぐれて大規模な印刷文化」(Chartier 1992: 153)が存在した。ヨーロッパの活版印刷の文化に対して、中国や日本では木版印刷の文化が存在したというわけである。こうしたことから彼は「西洋の印刷文化は、さまざまな印刷文化の一つの形にすぎない」(Chartier 1992: 153)として、「ゲーテンベルクの発明に絶対的な優位を付与する、昔ながらの西洋的な見解」(Chartier 1992: 68)は見直しを要するものと論じている。こうしてヨーロッパの活版印刷文化を印刷史の主流・中心として、その他の地域、たとえば東アジアの木版印刷の文化を軽視する論調を批判している。

シャルチエはヨーロッパの活版印刷文化と、東アジアの木版印刷文化との比較、つまり「二大文化システム」の間の比較の重要性に触れているものの、管見の限り、実際に比較検討は行っていないようである。本稿では、両者を——シャルチエは二大文化システムとしているがむしろ印刷に関する二大社会システムを——とくに資本主義に着目して比較検討していく。ただし、印刷・出版<sup>2)</sup>をとりまく社会的次元の検討に重きを置くので、印刷に用いられた書体や字形などの物的次元についてはほとんど言及しないこととする。本稿は拙論「文字の比較社会学・序」(鶴飼: 2019)のいわば続編であり、ユーラシアの東西——東アジアとヨーロッパ——の文字社会の比較検討を中心としている点は同じである。以下では、まずヨーロッパにおける活版印刷術の出現と展開について述べた後、東アジアにおける木版印刷術の出現と限界について論じ、最後に両者を比較分析してまとめとする。

## 2. ヨーロッパにおける活字印刷の出現と展開

15世紀のヨーロッパで活版印刷術を「発明」した人物といえば、周知のようにヨハネス・ゲーテンベルクである。ヨーロッパの活版印刷術は、特定の政治的権力や宗教的権力に密着して出現したものではなく、それらとはいささか距離を置きながら商業活動として出現した。当初から商業活動として、もっといえば初期資本主義のもとで出現したという点が重要である。ゲーテンベルクは商人ヨハネス・フストと契約を結び、融資を受けて印刷工房を拡充し、聖書、ラテン語文法書、免罪符、暦などを印刷した。しかし、聖書、とりわけ『四十二行聖書』の印刷には著しく費用がかかり、融資の返済が滞ったかどでフストに提訴され、1455年にゲーテンベルクは裁判に敗れた。抵当に入っていた印刷工房や印刷器具、そのほか刷り上がっていた印刷物(の少なくとも一部)をフストに没収されてしまった。こうしたことはもちろんゲーテンベルクという個人に起きた出来事にすぎない。しかしながら、ヨーロッパの活版印刷術の祖とみなされる人物が、融資を受けて工房を営みながら、利益が十分にあげられずに財を没収されたことは象徴的である。戸叶勝也はフストを、当時の「封建的秩序のなかにあって芽を出しつつあった初期資本主義の典型的な代表者の一人」と捉えている(戸叶 1997: 115)。ゲーテンベルクは発明の才を発揮

しながら、資金と職人を集めて経営するという点で、萌芽的なものとはいえ企業家的な一面をもっていた。

グーテンベルクと同じ15世紀を生き、主にイングランドで活動したウィリアム・キャクストンは、ウェストミンスターに印刷所を設け、自ら印刷機を操る印刷者であった。彼は書物の販売に力をいれた出版者でもあり、グーテンベルク以上に利潤追求に熱心な資本家であったと言われる(Feather 1988=1991: 24-25)。主にアントウェルペンで活動したクリストフ・プランタンも同様である。プランタンはポルトガルからポーランドにいたるヨーロッパの各大都市の出版業者と商業関係を結び、巨大な販売ネットワークを構築し、パリやサラマンカには「支店」のようなものを置いた(香内 1982: 88)。

フランクフルトには書籍を売買する大規模な書籍市が開かれた。フランクフルトは、グーテンベルクが活躍したマインツに比較的近い。フランクフルトはメイン川の河畔にあり、マインツはライン川とメイン川の合流点に位置する。いずれも交通の要衝(結節点)であり、水運を利用しながら遠隔地商業や手工業が営まれていた。フランクフルトには各都市・各国から多くの書籍業者が到来し、15世紀末から17世紀末頃まで国際的な書籍市が開かれ、出版業の中心地となった。なお、フランクフルトは17世紀後半から次第に衰えていき、書籍市の中心地はライプツィヒに移行した。フランクフルトは、ラテン語の出版物の売買を中心とした、国際的な書籍市であったのに対して、ライプツィヒはドイツ語の出版物の売買を中心としており、こう言ってよければ国民的な書籍市であった<sup>3)</sup>。

『出版革命』を著したエリザベス・アイゼンステインは、ヨーロッパにおける初期の印刷活動について、慧眼にも、「強固に統合された大国よりもむしろ結びつきのゆるい連邦制の小国で繁栄した」(Eisenstein 1983=1987: 284)と述べている。ヨーロッパにおける印刷・出版活動は、特定の政治的権力や宗教的権力に支配されたのではなく、言ってみれば「共同体と共同体の間の空間」で展開していった。もちろん出版物に対する庇護・特権や検閲など、さまざまなかたちで政治的権力や宗教的権力は関与していたが、印刷・出版活動は諸権力の合間で資本主義的な運動に即しながら展開したのである。

ここで資本主義と市場経済の相違について確認しておくのがよいだろう。資本主義とは、交換が一般化した市場経済の特殊なケースである。人々が市場で売り買いし、利益を追求したり、競争したりしているというだけでは資本主義的経済ではなく、市場経済である。貨幣という形で現れる価値の蓄積への欲望が無限化するというのが、資本主義の条件である(大澤 2022: 215)。もっとも現実には両者が峻別しにくい面もあり、印刷術が出現した頃のヨーロッパでは市場経済的な活動もあるなかで、資本主義的な経済活動も存在していただろう。ヨーロッパで活版印刷術が出現した後、急速に広まったのは、それがたんなる市場経済的な活動にとどまらず、資本主義的な活動に後押しされたことによる。同一の書物を迅速かつ大量に生産できる印刷術は、迅速におびたしい利益を上げようとする資本主義という文脈に置かれ、資本主義に適合的な技術として普及・活用されたのである。

宗教改革についても少し触れておこう。よく言われるとおり、マルティン・ルターは聖書をドイツ語に翻訳し、それが印刷・出版されてドイツ語訳聖書とドイツ語は広がっていった。聖書のドイツ語への翻訳は中世でも行われていたが、大量生産ができない手写本であったためほとんど普及しなかった（戸叶 1992: 45-46）。また、ルター訳ばかりが目されるが、ルター訳の聖書が広まる頃、カトリックの側も聖書のドイツ語への翻訳に着手していた。たとえば、ヒエロニムス・エムザーは新約聖書を訳し、ヨハネス・ディーテンベルガーは新旧両約聖書のカトリック版を作成した。ディーテンベルガーがまとめた聖書は 1534 年に出版された後、18 世紀に至るまで 100 版近くを重ねた（戸叶 1992: 49）。それでも 16 世紀における印刷術は、カトリックにとってよりも、「プロテスタントの進展にとって本質的な役割を演じるようになった」（Febvre and Martin [1958] 1971=1998: 248）。もとよりヴィッテンベルクという地方の小さな町で起こった宗教改革の運動がヨーロッパ各地を席卷するには、印刷（の波及力）が不可欠だっただろう。15 世紀後半に活版印刷術がヨーロッパの各地に広がっていたことは、16 世紀に宗教改革が拡大するための必要条件であったと考えられる。

17 世紀頃から小説（novel）というジャンルが出現し、18 世紀には小説の出版が本格化する。17 世紀後半には新聞や雑誌といった定期刊行物も、流通網の整備とともに発展していった。マックス・ウェーバーが言うように、「もっぱら印刷されることを予想し、また印刷を通じてのみ生命をもつこととなるような文書、とりわけ「新聞」や「雑誌」（Weber 1920-21=1972: 8, 強調は原文）が出現し定着した。新聞や雑誌といった定期刊行物は、発行の頻度や部数の少なかった初期の新聞は別として、印刷という複製技術があってこそ出現したのである。イギリスの出版史を詳述したフェザーは、イギリスでは「18 世紀の半ば頃には、定期刊行物はすでに今日と同じくらい、出版界にとって馴染み深いものになっていた」（Feather 1988=1991: 202）と述べている。

出版業も複雑化するとともに専門分化していき、印刷・出版・書籍小売がそれぞれ分化し、印刷所も書籍専門・新聞専門などに分かれていった。また、特定のジャンルについての本が、特定の出版者・出版社の名前と結びつけて考えられるなど、出版者や出版社がそれぞれの専門分野をもち、この点でも分化していった。こうした分化と分業形態の出現は、出版業の進展を示している。

19 世紀に入ると産業化・機械化が進み、技術革新が重ねられた。印刷・出版に必要な紙の生産が機械化され、紙が安く大量に生産されるようになった。19 世紀前半には蒸気印刷機が発明・導入されて印刷が高速化し、19 世紀後半にはアメリカで輪転機が発明された。またライノタイプ（行鋳植機）の発明と導入にみられるように、植字作業も半ば機械化されて高速で植字できるようになった（Hörisch 2001=2017: 160）。

こうした機械はとりわけ新聞印刷にいち早く導入された。新聞は毎日大量かつ高速に、比較的安価で印刷されなければならないからである。よく指摘されることだが、自国語で書かれた新聞を毎日読み、主として国内のニュースを国民がほぼ同時に知ることは、国民意識の醸成に一役

買ったと思われる。その前提として、19世紀には男女ともに識字率が上昇して、読み書きのできる人口が増加したということも挙げられよう (Vincent 2000=2011: 13-34)。また、19世紀における鉄道網の敷設と拡大のおかげで、出版者・出版社は速やかに比較的安価で、本や新聞を国内の各地に届けることができるようになった。

新聞産業では、紙を生産するための森林資源の大量採取や、日々くりかえされる新聞紙の大量生産と大量消費が常態となっている。そして、新聞は「一日限りのベストセラー」と呼ばれるように、一日経てば商品としては無用になり、新聞紙は大量に廃棄される。新聞(紙)はネーションおよびナショナリズムに適合的なだけでなく、大量採取・大量生産・大量消費・大量廃棄を構成要素としている点で、資本主義に非常に適合的な情報産業と言えよう<sup>4)</sup>。

本節で述べてきたように、15世紀半ばに出現した活版印刷術は、初期の資本主義を推進力としてヨーロッパ各地に急速に広まった。ラテン語——ヨーロッパにおけるいわば帝国の言語——で書かれた書物の出版は次第に減っていったが、各地域の俗語で書かれた書物の出版は徐々に増えていった。アンダーソンの言う「出版資本主義」である。しかし、前節でシャルチエの所論(「活版印刷のアンシャンレジーム」)に即して見たように、19世紀まではさまざまな制約により、出版資本主義の十分な展開は阻まれていた。19世紀に入ると、印刷の産業化と機械化が進行し、識字人口や読書人口も増え、書籍や新聞が大量に生産され、大量に消費される時代が到来した。出版資本主義につきまっていた制約が取り払われ、印刷・出版が著しく資本主義化——産業資本主義化——された時代である。出版産業は広範な資本主義経済の一部になり、ことさら出版資本主義と言う必要はなくなる。

### 3. 東アジアにおける木版印刷の出現と限界

印刷術は、ヨーロッパよりもずっと早く東アジアで出現した。中華帝国では、遅くとも8世紀には木版印刷がみられ、活字は11世紀に畢昇という人物が発明していたようである。ただし印刷の主流を形成したのは、活版印刷ではなく製版印刷(木版印刷)であった。

中華帝国における印刷と出版について、井上進の研究に即して見ておこう(井上2002)。書籍の印刷は唐代においては緩やかにしか進展しなかったが、宋(北宋)の時代になると印刷・出版は杭州、四川、福建などの一部の先進都市ではさかんにみられるようになった。出版は士大夫の要求に応じるように発展を遂げ、官庁だけではなく民間による出版活動も行われるようになる(井上2002: 134)。士大夫は儒教経典の教養を保持する者、すなわち「読書人」であり、知識階級に属する。宋代において書物の大部分は士大夫などの特権階級の専有物であり、実質的には身分的制約が存在した。書物は安価ではなかったということもあるが、かといって資力さえあれば、身分や地位を問わず誰でも多種多様な書物を購入できるというわけではなかった。とくに官製の本(官刻本)の購買や入手には、身分的制約がつきまとうものであった。

中華帝国における書物の分類方法として、官刻、家刻、坊刻という区別がある。官刻とは、王

朝や地方政庁の出した書物である。家刻とは、士大夫のような各地の有力者が自力で出した書物であり、坊刻とは、民間の書肆が出した書物である。これは権威の序列でもあり、しばしば書物の品質の序列でもあった。官刻は校訂がなされていて最も権威があり、家刻はそれに次ぐ権威と質を有していた。坊刻は校訂がしばしば不十分で、権威はもっとも低かった。書籍の権威や質は、官刻を最上位とし、民間の坊刻を最下位とする序列を構成していたのである。結局のところ、書物は政治的権力の中心（中央政府、さらにその中心に位置するのが皇帝）に近いほど高い権威が認められ、権力の中心から遠ざかるほど低い権威しか認められないことになる。これは中華帝国における「書物の秩序」において重要なことである。

モンゴル王朝の元代と、明代初期に出版活動は停滞期を迎える。その要因としては、モンゴル王朝（とくにその前半期）の中国文化に対する無関心や、積極的な文教政策の不在などもいくらかは関わっているだろう。出版活動は、なおも帝国の政治的権力に左右されるものであった。明代の前半では出版は極度の不振であり、坊刻よりも官刻が主流であった（井上 2002: 230）。とはいうものの、書物一般が購入できるようになり、蔵書の身分的制約が緩んでいった。とりわけ江南では営利出版が活況を呈し、書船（船で往来する移動書店）の活動もさかんになった。

明代初期においても鈔本（写本）の方が印刷本よりも多かったが<sup>5)</sup>、明末になると印刷本が普及する。出版量の劇的な増大の主力を担ったのが営利出版であった。「省都級の都市には書店街があり、中小都市にも何ほどかの書肆があるというのは、少なくとも 17 世紀に入れば、もはや北京や江浙だけの話ではなくなっていた」のである（井上 2002: 244）。なお、明朝体という書体の原型は、明代に使われるようになった印刷書体である（もっとも、それを鑄造活字にして規格化したのは欧米人である）。

しかしながら興味深いことに、清代では明代以上に営利出版が活発になったわけではない。清代になってから営利出版は明末よりも衰え、明清の交替を期に書物の世界は停滞に陥ったと、井上は述べている（井上 2002: 243, 342）。少なくとも、清代に営利出版が飛躍的に発展したわけではない。帝国における定期刊行物も非常に乏しかった。清末の 19 世紀前半に至るまで、中華帝国における定期刊行物は、邸報<sup>6)</sup>という中央政府の動向を記した小冊子と、そこから派生した小報にとどまった。これらのことは中華帝国における資本主義という無限拡張運動の不在が、営利出版を十分に発展させなかったことを物語っていよう。アンダーソンによる以下の指摘は的確なものである。

印刷術は、ヨーロッパに出現するおそらく 500 年も前に、まず中国で発明された。しかし、そこでは、資本主義が存在していなかったために、いかなる大きな衝撃も、まして革命的衝撃など、まったく及ぼさなかった。（Anderson [1983] 1991=1997: 89）

では、中華帝国に隣接する朝鮮ではどうだったのだろうか。朝鮮では 1230 年頃には鑄造銅活字による印刷が行われ、銅活字は李朝時代にさかんに鑄造された。李朝時代には世宗のもので、

後にハングルと呼ばれる表音文字、訓民正音が創られた。この『訓民正音』の解例本（1446年）には木版印刷が使われた。訓民正音という文字は、当初から手書きではなく印刷を介して公布されたのである<sup>7)</sup>。当時、勧学のために儒教のテキストは印刷されたが、印刷物の内容については王権が指定し、民間で自由に印刷することは許されなかった。帝国の文字（漢字）に対する俗語的な表音文字（訓民正音）、そして印刷技術が存在しても、それらが市場経済ないし資本主義経済に組みこまれないとなかなか広まらない。15世紀中葉といえば、ヨーロッパでは活版印刷が出現した時期であり、前節でみたようにそれは初期の資本主義経済に組みこまれて急速に広がっていったが、同時期の朝鮮ではそうではなかった。それでも王権によって頒布された訓民正音は少しずつ広がり、漢字の補助的な文字として使われるようになった。結局、訓民正音（ハングル）が国を代表する文字として認知されるのは19世紀末以降、帝国主義列強の圧力を受けて近代化が始まってからのことである。

中華帝国から海で隔たった列島社会、日本における印刷・出版についても見ておこう。日本の印刷・出版は、中野三敬によると、「遠く8世紀奈良朝の頃から製版の技法を以て始まるが、以来、写本文化の陰に隠れるような細流として17世紀の江戸に至るまで、ほとんど貴族と僧侶の専有物として非営利的に行われてきた」（中野 2011: 17）。印刷技術の出現は早いものの、江戸時代になるまで印刷・出版は営利事業とはならなかった。

キリスト教の布教とともにヨーロッパの印刷機が日本に初めて導入されたのは1590年である。しかし、その後に禁教令が出されたこともあり、この活字による印刷方法は日本に定着しなかった。他方で、豊臣秀吉は朝鮮出兵の翌年（1593年）、日本に持ち帰られた朝鮮銅活字を後陽成天皇に献上した。この朝鮮銅活字をもとに、徳川家康は銅活字（一部は木活字）の製作を命じた。これにより『大蔵一覽』や『群書治要』といった書物が印刷されたが、銅活字を用いた印刷活動は、その後に継承・発展されることはなかった。活字が普及しなかったことについては技術的・実用的な理由が指摘されることもあるが<sup>8)</sup>、当時は流通機構が未整備で、印刷・出版が十分に商業化されなかったことが大きいと考えられる。江戸時代を通じて書物の生産は、木版印刷（製版印刷）と写本によって行われた。

日本で営利事業としての印刷・出版が出現したのは、17世紀前半の寛永期の頃からである。17世紀の京都で、寺社や僧侶が經典の発行に力を入れはじめ、經典の複製・配布を手がけたのが出版業の端緒のひとつである。京都から始まった出版業は、大坂と江戸にも拡大し、やがて名古屋でも営まれるようになった。18世紀末の寛政期以降、それまで京都・江戸・大阪・名古屋の4都で主に営まれていた出版事業は、地方に広まり、各地の藩にも出現した。このように江戸時代に出版事業は始まり、次第に各地に広がっていき、江戸時代を通じて書物の数と種類は増加していった（橋口 2011: 54-55）。本屋だけではなく貸本屋の存在も大きい。貸本屋は本を安く貸し出し、本の購入が難しい人々に読書の機会をもたらし、書物はいつそう普及していったのである。

書物の増加にともない、幕府はそれを管理するため、出版条例を出して出版物の規制を行った。



代表的な規制は享保7年（1722年）の出版条例であり、それは出版規制の基本法として幕末まで踏襲された（中野 2011: 43-44）。こうした出版規制は、市場経済的な商業活動の繁栄とともに増加し多様化していった書物に対して、幕府がなにほどこか規制を加えたことを示している。だが、印刷物には部分的に規制が加えられても、写本は一時期を除いて規制の対象とはならなかった。しかも写本はかなり多く、橋口侯之介の調査によると、江戸時代を通じて書物点数のおよそ4割は写本である（橋口 2011: 187）。幕府による出版統制が、江戸期の「書物の秩序」に対して及ぼした作用はかなり限定的であったと思われる。

他方で、江戸期の写本の多さは、印刷技術が普及しても写本の習慣が必ずしも廃れるわけではないことを示している。ヨーロッパでは活版印刷が爆発的に広まった後、写本は規制から逃れるための地下写本などごく限られた領域でみられるにとどまった。資本主義経済を背景に活版印刷と出版活動が急速に広がり、写本を衰退させたヨーロッパの方が例外的なのであろう。日本で写本の習慣が消滅したのは、近代が始まった明治期である。

#### 4. 印刷・出版の比較検討

アンダーソンによると、ネーションの形成には「生産システムと生産関係（資本主義）、コミュニケーション技術（印刷・出版）、そして人間の言語的多様性という宿命性のあいだの、なかば偶然の、しかし爆発的な相互作用」（Anderson [1983] 1991=1997: 82）が重要である。この箇所はよく引用されるわりに意味が明確ではないが、3つの契機として①資本主義、②印刷・出版活動、③俗語に対する関与（コミットメント）、を取り出しておこう。近世ヨーロッパではこれら3つの契機の相互作用がみられたのに対し、近世の中華帝国では各地の多様な口語は出版語とはならず、帝国の文字（漢字）が印刷・出版された。しかし資本主義がおよそ不在であったため、印刷・出版活動が継続的に展開したり、急速に拡大する動きはみられなかった。李氏朝鮮では俗語の文字（訓民正音）は、その出現の当初から印刷に付されたが、ここでも同様の理由から、訓民正音の普及には時間がかかったようである。近世日本の位置づけは難しい。資本主義経済とは言わないまでも、市場経済の活況ゆえに印刷・出版はゆるやかに展開し、18世紀には、都市部が中心であるとはいえ全国的に書物が行き渡りはじめていた。

ニクラス・ルーマンは中国および朝鮮での印刷と、ヨーロッパにおける印刷とを比較して次のように述べている。

中国および朝鮮では印刷機は支配官僚機構の掌中にあり、したがって中央から発せられた伝達を広めるためだけに用いられていた。これに対してただヨーロッパにおいてのみ、市場と価格を介して、脱中心的なかたちでの流布が行われていたのである。聖書をできるだけ多くの人を読めるようにと翻訳し、印刷して学校に配備することが可能になったのも、このような条件の下でのことだった。（Luhmann 1997=2009: 326）

かつて中国および朝鮮では、印刷は支配官僚機構に中心化されていたのに対し、ヨーロッパにおいてのみ、印刷物は脱中心的なかたちで流布が行われたというのである。もっとも、これはいささか単純化された理解であり、中国（中華帝国）では印刷機が支配官僚機構の掌中にものみあったわけではないし、中央から発せられた伝達を広めるためだけに用いられていたわけではない。民間の印刷・出版は遅くとも宋代には出現していた。ただし中華帝国では、書物に官刻・家刻・坊刻という権威や価値の序列があり、支配機構の印刷物が最上位に位置していたことを顧みれば、ルーマンの整理は要点を捉えている面もある。

ヨーロッパでの書物の印刷と流布は、ルーマンが市場と価格を介した「脱中心的なかたちでの流布」と述べているように、そして本稿で見てきたとおり、資本主義経済に即したものだ。活版印刷が出現した当初は、ラテン語で書かれた書物が出版の中心であったが、16世紀以降、俗語（後には国語）で記された書物の出版が増えていった。それは資本主義——既存の共同体を越えていく脱中心的な運動でもある——の展開とともに、出版事業がラテン語という帝國的な言語からしだいに離脱し、脱中心化していく過程でもあった。

中華帝国では宋代において、印刷・出版はそれなりに繁栄したが、書物の大部分は士大夫や「読書人」のものであり、階層的・身分的な制約がつきまとっていた。帝國的な社会は、皇帝を中心とした階層構造の強固な社会であるが、書物の領有もエリートに中心化されていた。明代後期では民間での出版が活況を呈したが、くりかえし述べてきたように、資本主義という運動が不在で、出版活動が継続的に発展したり、飛躍的に拡大したりすることは長らく阻まれた。中華帝国は、漢字使用を広域統治の中枢に組みこみ、漢字に精通した官僚が統治に重要な役割を果たした帝国（いふなれば「漢字の帝国」）であるが、漢字が印刷・出版を介して広まり、万人のもとに行き渡ることが阻害されてきたような面がある。一説によると中国では、中華人民共和国が建国された時でも、読み書きがほとんどできない人が全人口の8割以上もいた（阿辻 1999: 7）。漢字の読み書きに精通することは、基本的に長らくエリート層に求められるものだったのだろう。

近代においてヨーロッパに由来する活版印刷の技術は、ヨーロッパの外にも広まっていった。当初は宣教師たちの活動によって広まり、やがて資本主義の展開に後押しされながら、植民地化や帝国主義的拡大に沿って世界各地に広がっていった。近代世界に入って、活版印刷に比べて実用的な利点もあった木版印刷（製版印刷）は衰退し、また東アジアの一部に根強く残っていた写本や写本文化も消えていった。こうしたことの経緯は稿を改めて別途論じることにした。

## 註

- 1) 「書籍商人による出版業の支配」について、シャルチエは印刷業の親方たちに出来高払いで仕事をさせていたことなどを挙げている。シャルチエは述べていないものの、おそらくより重要なこととして、小規模な書籍市場で価格の下落を抑えるために、書籍商がしばしば印刷部数を制限していたことも挙げられよう。

- 2) 「出版」と「印刷」を区別しておくのがよいだろう。今田洋三によると、出版 (publishing) とは、「文字化、あるいは記号化された精神活動の所産を、印刷という技術と、販売という経済的活動を通して社会に送り出す」(今田 [1977] 2009: 5) ことである。出版は文化的活動でもあるが、経済的活動、結局のところ営利活動という面が強い。印刷 (printing) は多数の複製物をつくる技術 (大量複製技術) であり、出版は概して印刷を前提としながらも経済的活動に重心を置いている。
- 3) フランクフルトの書籍市の衰退とライプツィヒの書籍市の繁栄という出来事の意義に着目しているのは、フェーブルとマルタンである (Febvre and Martin [1958] 1971=1998)。フランクフルトはヨーロッパの大書籍商の落ち合う場所であったが、ライプツィヒの市に集まったのは主にドイツ人書籍商であり、その他はロシア人、ポーランド人、オランダ人を数える程度であった。フェーブルとマルタンによると、「1630-1640年頃のライプツィヒの大市の繁栄は、出版業の分散化の始まりを意味している。ラテン語の書物の出版が次第に少なくなり、代わって各国語で書かれたテキストの比重が高まるのと同時に、ヨーロッパでの書物取引は細分化することになる。」(Febvre and Martin [1958] 1971=1998: 132)
- 4) 電子化された新聞は、紙資源のための大量採取を必要とせず、新聞紙の大量廃棄もなく、そうした資源の有限性に限界づけられていないという点ではいっそう資本主義的な無限拡大に適しているとも言える。
- 5) たとえば、明初文淵閣の蔵書は「刻本が十の三、鈔本が十の七」であったが、16世紀後半の嘉靖末年より万暦中年にかけて、范欽、大沖父子が蒐集した寧波 (浙江) 天一閣の蔵書4千部では、「刻本が十の八、鈔本が十の二」になっていたという (井上 2002: 248)。明末には印刷本が主流となっていたと思われるが、それでも鈔本 (写本) が消滅したわけではないということも重要であろう。
- 6) 邸報は、宮廷の動静、皇帝の諭旨、大臣の上奏文など中央政府の動向を記した政府公報のようなものだが、複数の民間の出版業者によって発行された。小報は、はじめは役人が邸報の内容を抜粋して速報したものであるが、やがて邸報にはない内容を含むようになり、小報の発行により利益を上げる民間業者も出現した (足立・三沢 1983)。近代的な定期刊行物たる新聞や雑誌は、1830年代に欧米の宣教師や商人によって帝国の東南沿海部に持ちこまれたが、それらが普及していったのは日清戦争以後である (殷晴 2018: 1832)。
- 7) 1446年に頒布された『訓民正音』の解例本には木版印刷が使われたのに対し、1448年に頒布された『東国正韻』という朝鮮王朝の韻書には活版印刷が使われた。鈴木広光は、朝鮮官版の印刷出版について、「活字印刷と木版印刷との間には機構的、機能的な棲み分けがあった」(鈴木 2015: 27) としている。これは当時としてはかなり成熟した印刷文化の存在を窺わせる。それでも、李氏朝鮮の活字鑄造事業は王権の管理下にあり、鑄造された活字を民間に普及させる意図はなかったと考えられる。
- 8) 17世紀の日本では古活字版が衰退した一方で、木版 (製版) 印刷が次第に活用されたという経緯もあり、古活字版の衰退理由はしばしば次のような実用的な観点から説明される。活字はくりかえし使われるため、印刷後に版を解かねばならないが、木版印刷では版木を保存しておけば、必要に応じて増刷することができる、というものである。ただし、この説明は一般的すぎて、ヨーロッパで木版印刷よりも活版印刷が主流になった理由が説明しにくくなる。もっとも、よく言われることだが、アルファベットは漢字等よりも文字の種類が少ないため、同一の活字を多く鑄造しておけばよく、植字作業も効率的に運ぶので、アルファベットは活字印刷に好都合だったという実用的理由は否定できない。

#### 参考文献

足立利雄・三沢玲爾, 1983, 「中国報紙 (新聞) 史研究 (Ⅱ) — 邸報および小報について」『関西大学社

- 会学部紀要』15 (1), 187-216.
- Anderson, Benedict, [1983] 1991, Revised Edition *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, London and New York: Verso. (白石隆・白石さや訳, 1997, 『増補 想像の共同体』NTT出版.)
- 阿辻哲次, 1999, 「21世紀の漢字文化圏を考える」蘇培成・尹斌庸編, 阿辻哲次・清水政明・李長波編訳, 1999, 『中国の漢字問題』大修館書店, 1-34.
- Chartier, Roger, 1992, 福井憲彦訳, 『読書の文化史 — テクスト・書物・読解』新曜社.
- , 1992, *L'ordre des livres: Lecteurs, auteurs, bibliothèques en Europe entre XIVe et XVIIIe siècle*, Aix-en-Provence, Editions Alinea. (長谷川輝夫訳, 1996, 『書物の秩序』筑摩書房.)
- Eisenstein, Elizabeth L., 1983, *The Printing Revolution in Early Modern Europe*, Cambridge: Cambridge University Press. (別宮貞徳監訳・小川昭子・家本清美・松岡直子・岩倉桂子・国松幸子訳, 1987, 『出版革命』みすず書房.)
- Feather, John, 1988, *A History of British Publishing*, London and New York: Routledge. (箕輪成男訳, 1991, 『イギリス出版史』玉川大学出版部.)
- Febvre, Lucien and Henri-Jean Martin, [1958] 1971, *L'apparition du livre*, Paris: Albin Michel. (関根素子・長谷川輝夫・宮下志朗・月村辰雄訳, 1998, 『書物の出現 下』筑摩書房.)
- 橋口侯之介, 2011, 『江戸の本屋と本づくり — 続 和本入門』平凡社.
- Hörisch, Jochen, [2001] 2011, *Der Sinn und die Sinne: eine Geschichte der Medien*, Berlin: AB-Die Andere Bibliothek GmbH & Co.KG. (川島建太郎・津崎正行・林志津江訳, 2017, 『メディアの歴史 — ビッグバンからインターネットまで』法政大学出版局.)
- 香内三郎, 1982, 『活字文化の誕生』晶文社.
- 加藤秀俊, 2015, 『メディアの展開 — 情報社会学からみた「近代」』中央公論新社.
- 今田洋三, [1977] 2009, 『江戸の本屋さん — 近世文化史の側面』平凡社.
- 井上進, 2002, 『中国出版文化史 — 書物世界と知の風景』名古屋大学出版会.
- 殷晴, 2018, 「清代における邸報の発行と流通 — 清朝中央情報の伝播の側面」『史学雑誌』127 (12), 1807-1844.
- Luhmann, Niklas, 1997, *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (馬場靖雄・赤堀三郎・菅原謙・高橋徹訳, 2009, 『社会の社会 1・2』, 法政大学出版局.)
- McLuhan, Marshall, 1962, *The Gutenberg Galaxy: The Making of Typographic Man*, Toronto: University of Toronto Press. (森常治訳, 1986, 『グーテンベルクの銀河系: 活字人間の形成』みすず書房.)
- 中野三敬, 2011, 『和本のすすめ — 江戸を読み解くために』岩波書店.
- 大澤真幸, 1995, 『電子メディア論 — 身体メディアの変容』新曜社.
- , 2022, 『経済の起原』岩波書店.
- Ong, Walter J., 1982, *Orality and Literacy: The Technologizing of the Word*, London, New York: Methuen & Co. Ltd. (桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳, 1991, 『声の文化と文字の文化』藤原書店.)
- 鈴木広光, 2015, 『日本語活字印刷史』名古屋大学出版会.
- 戸叶勝也, 1992, 『ドイツ出版の社会史 — グーテンベルクから現代まで』三修社.
- , 1997, 『グーテンベルク』清水書院.
- 鶴飼大介, 2019, 「文字の比較社会学・序 — 「漢字」と「アルファベット」の形成と展開」『社会システム研究』22: 217-232.
- Vincent, David, 2000, *The Rise of Mass Literacy: Reading and Writing in Modern Europe*, Cambridge: Polity Press. (岩下誠・相澤真一・北田佳子・渡邊福太郎訳, 2011, 『マス・リテラシーの時代 — 近代

ヨーロッパにおける読み書きの普及と教育』新曜社.)

Weber, Max, 1920-1921, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, Tübingen: J.C.B. Mohr. (大塚久雄・生松敬三訳, 1972, 『宗教社会学論選』みすず書房.)